

終戦から七十四年が経った今日の日本の若者にとって戦争とはあまりにも縁遠いものである。もちろん僕もその中の一人だ。そんな僕が今回応募したのはとある戦争体験者の方のお話を拝聴できた機会があり、多くのことを考えさせられたからである。

お話をしてくださった方が体験されたのは沖縄戦における疎開生活だ。疎開とは言っても沖縄戦において沖縄本島に安寧な地は無く、すでに戦闘機の音に怯える日々、加えて一人、また一人と亡くなってしまふ家族を見なければならぬという苦痛を感じながら逃げ続けるという本当に過酷な生活だったという。

話を聞くだけでも心が痛むのに、実際に体験された方の苦悩は安易に想像できるものではないだろう。そう思いながらも自分が戦争のある時代に生まれなくてよかったと安堵したのも事実だった。

もう一つ僕がお話を聞いて感じたことがある。それは僕自身が今生きているということだ。

僕の祖母は当時広島県に住んでいた。当時3歳だった祖母は奇跡的に家族とと共に生き残ったけれど、知り合いの中には家族ごと亡くなってしまった人がいたり、皮膚が溶けてしまっている人がいたりしたようだ。今の僕がいるのは祖母の奇跡があったからだとしみじみと感じた。

平和への想い

芝高等学校2年

川野眞雅

このように現代の若者の中にも間接的に自分の命と戦争が結びついていている人は多いだろう。だからこそ今の平和に甘えることなく、昔の人々の惜しみない努力と平和を切に願ってきた思いをよく考える必要があると思う。

僕が小学校2年生の時、夏休みに広島にある祖母の家に遊びに行った。ちょうどその頃、広島県にある平和記念公園で近隣の小中学校生が全員参加する追悼式が行われていた。小中学生でもなぜ追悼式をするのかは分かっているのですが本当に真剣であった。しかしそこには年配の方々とは明らかに異なることがあったのをよく覚えている。それは涙の有無である。実際に戦争を体験した人とそうでない人では追悼に向けられた思いの重さが違うのだろう。

僕は追悼式の後、平和記念博物館に連れて行かれた。当時の町並みや原爆投下後の人々の様子が展示されていた。当時の僕にとってそれらは本当に怖かったのだろう。全てを見ずに走って外に出たのを覚えている。今思えば昔の方が戦争に対する恐怖心というものを感じていたのかもしれない。

現在の平和な環境は、そこに身を置く人々に戦争という恐怖を忘れさせてくれるある種の麻薬のようを感じる。人々を安心させる反面、中毒性が強いので身の危険に対する耐性が著しく弱まる危険性もある。世の中が平和なのは素晴らしいことだが、人々が危機感を持って、初めて真の平和と言えると思う。